

日本人の宗教心(V)

— 田の神考 —

大 江 法 城*

The Religious Sentiment of the Japanese (V)

— Concerning *Kamis* of rice fields —

Hojo OHYE

Many folk faiths are still observed in throuout Japan. It is believed that many old gods and goddesses are still alive there today. *Kamis* of rice fields are also well-known to Japanese people.

I would like to study an aspect of the religious sentiment of the Japanese through an investigation of *kamis* of rice fields in the Hokuriku area.

I はじめに

これまで、日本人の宗教心なるものを追い求めてきたが、古代の日本人も現代の日本人もその宗教心に限るならば、それほど変化していないのではないかと最近考えるようになった。

たしかに衣食住の全てにおいて大きく変化してきている。洋服中心の姿はヨーロッパと何等変わるどころもなきに至ったし、洋食と和食がほどよく調和して食卓に並べられ、椅子やソファでの生活に何の違和感もない現代である。

近代合理主義は科学を武器に発展してきたことは誰もが認めるところである。中でもコンピューターの発達が目覚ましいもので、我々の毎日の生活はハイテクに支えられている。便利さのあくなき追求から、交通手段を始めとしてあらゆるものが便利な時代となった。近年になってまさしく大きな変革が起きていることは疑いない。しかし、この変革が人類にとって成長と言えるかどうかは議論のあるところである。

科学は確かに迷信を打破する。しかし、今の平均的日本人が全く合理的で科学的な生活を送っているとは思いがたい。例えば結婚式は大安の日、葬式は友引の日を避けて行う人が多い。死や苦をイメージするとして、数字の4や9を忌み嫌う人も多い。確たる信仰もなくして、初詣でに神社を訪ね、葬式となると仏式となる。若者となると、キリスト教会で結婚式をと考える者も後を絶たない。コンピューターによる占いにも関心が寄せられる。ハイテクを駆使したビルが建てられても、その屋上に祠が祭られたりしている。さすがに方位をやかましく言う人はないが、建築物となると、方角を気にする人はまだいるようである。こういったことは数え上げるとキリ

*教養部

がない。

民俗信仰や民間信仰と呼ばれるものも生きづいている。勿論、本稿で取り上げる『田の神』信仰一つにしても、簡略化や複合化等がなされ大きく変質してきていることは否めない。しかし、民俗行事としても、まだどっこい生き残っているものもあれば、色濃く痕跡を残しているものもあるのである。

本論では、北陸地方に残る『田の神』信仰を能登半島と福井県嶺北地方に訪ね、日本人の宗教心の一端を考察してみたいと思う。

II 奥能登のあえのこと

平成6年12月4日、5日に、輪島市に残る田の神信仰『アエノコト』を調査した。簡略化がかなり急速に進む中で、一軒だけ頑なにこの伝統を守る中谷省一家を訪ねることにした。

奥能登におけるアエノコトは昭和51年文化庁から重要無形民俗文化財に指定され、奥能登のあえのこと保存会も結成されていることから、関係資料の収集保管、記録保存、伝承者の養成など、こういった文化財の継承には比較的恵まれた環境にあると言える。柳田村、穴水町、輪島市、門前町、珠洲市、内浦町の2市4町1ヶ村に及ぶものである。

奥能登の地域を考えると、能登半島の先端にあり、旧鳳至、珠洲両郡に当たる鳳至丘陵のわだかまる部分の中核とする一帯である。深雪地帯であり、鳳至丘陵が陸路交通の障害でもあったため、京都や奈良などに栄えた文化も伝播しにくく、一旦進入した文化はそのまま停滞し、変質・風化しながらも根強く残る傾向がある。小集落が多く、孤立的だが連帯性もあり、人々は社会的規範に従順で、ムラ意識も強い方だと窺える。さいはての地は超保守的傾向が強く、ここも例外ではない。しかし、その保守性ゆえにアエノコトという古い民俗行事が今に伝わっているのである。

まだその伝統が比較的守られているという柳田村に比べると、輪島市におけるアエノコトは衰微の一途をたどっていると言われている。今回、研究のサンプルに選んだ中谷家は、輪島市町野町字徳成ハ乙94番地にある。ゴテ（当主）の中谷省一氏は60歳代後半であるから、当分はマツリゴトとして続けられるであろうが、20年、30年後になるとはたしてどうであろうか。

この地方では、12月5日に神迎えのアエノコトが行われる。当日迄の2、3日前から準備が始まる。まず、近くの山から栗の木を切ってきて、皮を剥き、1尺2寸の箸を2膳用意する。1尺2寸であるのは、1年12ヶ月を意識したものである。他には自宅で間に合わすことの出来ないもの、ハチメ（鯛の場合もある）や豆腐、酒などが用意される。

5日の午後3時過ぎに、ゴテが袴の正装で平鍬を手にして苗代田の畦に行き、鍬で田をおこし、二拍手して、「田の神様、お迎えに上がりました。ご苦労さまでございました。こちらへどうぞ、どうぞ。」と玄関から奥の座敷へと案内する。すでに、奥座敷の床の間には、種初俵2俵がタテに並べられており、その上に二股大根が乗っている。そこまで案内すると、また二拍手して、「

ご苦労さまでございました。どうぞ、ゆっくりお休み下さいませ。」と言って、拝礼する。

一息してから、今度は風呂場に案内し、「田の神様、お風呂をどうぞ。湯加減はよろしゅうございますか。どうぞゆっくりおつきり下さいませ。」と、申し上げる。最近新しいタオルが使われるが、昔は手織りの藤布（ダコヌノ）が用いられていた。ゴテは台所の炉端で田の神の湯上がりを待つ、田の神の湯あみは約20分程度である。

奥座敷には輪島塗の宗和膳が二膳用意されるが、田の神は夫婦神であることが知れる。お膳には碗が5個、ご飯は白飯で12椀盛り、1椀を1ヶ月に見立てて12回の大盛りになる。汁碗には椎茸の味噌汁、煮物碗にはワングリ（大根の輪切り）、人参、薺、牛蒡、豆腐、蒟、芋の子の7種を煮込んだもの。向付は大根ナマスと豆腐の田楽。別の皿にはハチメの尾頭付き。膳の横に酒のための碗。手前に銚子が一本。真ん中にスズ（陶製の酒瓶）とキッタテ（漆塗りの提子）。キッタテには甘酒が入れられる。

湯あみの後、奥座敷上座には既に田の神さまは着座されていると思われる。肩衣を着けたゴテが神前に進み、二拍手拝礼して、「田の神様、今年もご苦労さまでございました。ご馳走は十分用意してございます。どうぞごゆっくりとお上がり下さいませ。」と述べ、銚子を取って「御神酒でございます」と、男神、女神に3回ずつ酒をすすめる。次いで、キッタテを取り、「甘酒でございます」3回注ぎ、次にスズを持って、「上モン（上等の酒）でございます。」とこれも3回注ぎ終わると一旦下座に復座する。

しばらくして、再び神前に進み、「田の神様、ご馳走は山の幸、海の幸、畑の幸と盛りだくさんに用意してございます。お汁は椎茸の味噌汁、お平（煮物碗）は大根の輪切り、人参、薺…。魚はハチメでございます。」と品々を一つ一つ説明する。田の神様は、稲穂の先で目を痛めており、目が見えないという。最後に、「ごゆっくりお上がり下さい」と挨拶して下る。

家族の夕食時になると、「お粗末さまでございました。」と拝礼してお膳等を下げ、皆で分け合ういわゆる直会となる。種耨2儀は2月9日の神送りのアエノコトまで床の間に置かれる。田の神様はそこにこもっておられると言われる。

2月9日の午後には、今度は神送りのアエノコトが行われる。神迎えの時と同じく奥座敷に神座が整えられ、風呂の案内がなされる。やはり同じようなお膳が用意され、田の神は饗応を受ける。その折の口上は、「田の神様、今年もご苦労さながら、雨にも負けず、風にも負けず、虫にも負けず、照りにも負けず、豊作をお願いしてお送りもうします。」と述べて拝礼する。

午後3時過ぎ、鎌を手に苗代田に行き、鎌を3回打ち込んで拍手拝礼して、「今年もご苦労さながら、雨にもかぜにも虫にも照りにも負けず、豊作をお願いいたします。」と唱えて拝礼する。平成6年の場合、夏の暑さが厳しかったので、「暑さにも負けず」が加えられた。

家族一同での直会が行われること、ゴテが袴を着用することなど、神迎えのアエノコトと全く同じである。

『奥能登のあえのこと』を国の重要無形民俗文化財に指定した文化庁の『月刊文化財』152号には、次のように解説されている。

「この行事は農耕儀礼の典型例として奥能登に顕著な分布を示す。各農家における行事次第や内容には細部に相違が認められるものの、ゴテみずからの采配によって収穫後に田の神を迎えて丁重に饗応し、翌年の春にも同様の饗応をなして田の神を送り出す形態が一般的であり、眼前に田の神がいますがごとく執りおこなう所作や直会には豊饒に対する感謝と願いが素朴な儘に発露されている。稲作農耕に従ってきた我が国民の基礎的生活の特色を典型的に示す事例として極めて重要である。」

詳しくは『奥能登のあえのこと保存会』（代表者 原田正彰氏）が昭和53年3月31日に発行した『奥能登のあえのこと』を参照されたいが、いくつかの特徴が挙げられる。

まず、アエノコトという呼称なのは奥能登に集中しており、他の能登地方では「田の神様」や「田祭」と称している。厳肅度や信仰度は前者に強く、後者では弱くなる。次に、各農家毎のマツリであるということである。集落単位のものではなく、地域協同性は見られず、主として当主（ゴテ）の信仰によって執り行われるところがユニークである。したがって地域により、各家によって色んな差異が窺える。田のみの神でなく、山の神でもあり、家の祖先でもあり、畑の神でもあると家によってもそれぞれ違う。盲目とする家、片目とする家、全く正常とする家がある。陰陽二柱の夫婦神とする所が多いが、複数とは認識されてない場合もあり、子神を含めて三柱とする所もある。性別を論じない独神の場合もあり、主従を従えた四柱を考える所もある。ウケモチノカミ（保食神）、ウカヒメ（稲魂女）、イナリ（稲荷）等とも認識されている。行われる日時にも若干のズレがある。しかし実際、12月5日に神迎えをし、2月9日に神送りが行われることが多い。昔は陰暦霜月五日と睦月九日にそれぞれ行われたためである。神の依り代として松が飾られるケースも目につく。アイノコトと呼ばれる地域もある。饗応のご馳走に至っては、当然地域によっての相違が目立ってくる。神送りの前日に若木迎えを行う所もある。鉈を手にして山に行き、若松の根元に餅二つと酒を供え、山の神に祈り、松は持ち帰り、ユズリハを添えて神座に飾られる。恭しく祝詞が奏上される所もあれば、声高に田歌が添えられる場合もある。夫婦と一緒にナンド（寝室）ですごされると考える所もある。二股大根が添えられることが多いが、普通の生の大根の場合もあれば、大根は用いない所もある。簡略化が進んでいる地区になると、12月5日に玄関先でふだん着で神様を迎えることになるし、カイモチ（おはぎ）だけを神棚にお供えすることになる。種粃俵の中味も、昔は栽培された全品種が詰められたが、今はうるち米だけというのが多い。神送りよりも神迎えの方が丁重に為されているのは共通している。田の神様の絵像掛け軸や二股大根の絵図が掛けられることもある。迎える場合に、背負う格好をするケースもある。炉端で寸時休まれることもある。拝礼、拍手についても相違点が目立つ。

奥能登におけるアエノコトの多様さについてだけでもキリがない。

Ⅲ 福井県嶺北地方の田の神

福井県内で田の神信仰が現存もしくはその痕跡が色濃く残っているのは次の地区である。

武生市平林町、武生市余田町（はぐり町）、武生市本保町、今庄町八飯、福井市上一光町、坂井町島などである。

武生市平林町の村中に、約30平方メートル位の共有地があり、昔田んぼから出たと言われる石が5個横に並べられている。全て自然石ながら、石碑か墓石のようである。その奥に小さな祠が建てられており、中を覗くと石の扉の左右に日（太陽）、三日月が彫られている。2、3年前迄はその脇にかなり大きな樺が一本立っていたが、今は枯れてしまって根の部分が残るのみである。祠の右脇に『御田之神様境内』と書かれた石標が立っている。昭和38年12月の建立となっている。村人によれば、この土地は十人衆の共有地で、古くより田の神様として信仰を集めてきているという。樺の葉をはらうのにも、神主のお載いを受けてからでなければ手がつけれなかったし、葬式の列もここをはばかって通ると言う。今も12月5日午後3時過ぎに祭の当番に当たった宿の主人は羽織、袴で正装し、田の神様五柱に一基ごとに洗米、神酒、大根、塩などの神饌をお供えする。その後、宿では十人衆を正座に、氏子入りした男子が年長順に並び、大根の輪切りに塩をつけてさかなにし、神酒をいただく。昔は、その後、婦人方が招かれ、男子が酒の酌から給仕一切をやったと言う。ここでは3月7日に『長事（おとなごと）』といういわゆる成人式がおこなわれた。なお、田の神様の日に、各家では、神棚に、神酒、ばた餅、鯛、油揚げ、牛蒡、人参、大根、田芋などの煮しめを、藁で編んだ藁碗に入れて供えたそうである。

武生市余田町は三垣内に分かれていて、それぞれに田の神様の小祠があり、相の事（アイノコト）と呼ばれている。今では形ばかりになったが、5アールほどの共有田が一年交替で耕作され、その収穫で田の神祭が行われてきた。12月5日には神主が祝詞をあげ、その後当番の家に垣内中の一家の主人が皆招かれてご馳走されたという。やはり、羽織、袴の正装であった。各家では、床の間に三社託宣の軸などを掛け、その前に箕を二つならべ、神酒、するめ、餅、藁碗に入った飯（いい）、藁碗に盛った芋と小豆の煮物、果物などを供える。昔、この相の事とオダイダという行事が行われたと言われるが、オダイダというのは平林町でも行われていたとされる婦人だけの宴会ではなかっただろうか。余田町公民館脇の祠には、田の神の石像が狐を下に座っておられ、右手に鎌、左手に稲穂を持っておられる。

近くの武生市本保町でも、やはり『相の事』がわずかに伝わっているが、やや趣を異にする。12月5日にばた餅を作り、家の中の井戸にお供えする。ここでは、田の神様はこの日に井戸に入って1月5日まで休まれると信じられている。5日には、正月の床の間飾りはそのままながら、神酒だけは替え、鯛などの赤い色の魚と強飯をお供えする。

今庄町八飯では、17、8年前までは12月5日にアイノカミの行事が行われていたが、最近でも3月5日に五目ずしなどを神仏に供える家があり、アイノカミと呼ばれている。

福井市上一光町では、12月5日に、家を支える中心の柱の前にゴザか畳を敷きお膳に砂糖醤油をつけた餅、ホナガ（蕨をゆでて味つけしたものにきな粉をまぶしたもの）、御神酒をお供えしたと言う。また神棚にネジダンゴが飾られた。この日に田の神様が天から降りられてその日のうちにお帰りになると信じられている。

坂井町島には合葉の祭（アイバノマツリ）が今もていねいに行われている。以前は毎年節分の日（2月3日か4日）に行われていたが、現在は正月4日である。ここでもアイノカミと呼ばれる神が春日神社の境内に祀られており、村人は勿論近隣の人々からも崇敬されていた。祠は高さ約1m、間口奥行きともに約65cmで入母屋造りの石製である。扉には左に日（太陽）、右に三日月が彫られている。中を覗くと、左には箕を持った神、右には櫛を持った神の二体の石の神像が浮き彫りにされている。豊作の神、百姓の神と崇められている。当日朝から当番の宿では、年かさの大きい男の子を2、3人呼び、櫛と袋を持たせて各家に米を集めに回らせる。男の人がご飯を炊き一升にぎりと呼ぶ大きいおにぎりを二つ用意し、更に新葉を巻いて円形の葉巻を作る。生大根を漬け物の形に切る。葉巻におにぎりを乗せ、竹の箸をさして、正午までにアイノカミに供える。葉と青竹で約2mを越えるお花を立て、太鼓で準備の出来たことを村人に知らせる。神主の祝詞奏上がすむと、お花に火がつけられ燃やされる。いわゆる左義長のスタイルである。だから、この火で餅を焼いて食べると病気が治ると言われている。神社での行事が終わると、子供たちは当番の家に行き昼食となり、夕方まで楽しく遊ぶ。以前は、その宿で風呂にも入り、夕食まで食べたという。アイノカミに供えられたおにぎりはそのままにされ、鳥や獣の食べ物となるが、その食べ方が早ければ豊作、遅ければ凶作と信じられる年占いである。色んな行事が複合したものと思われるが、アイノカミの呼称、神様が二体であること、もと行われていた時期が他の地区の田の春祭の時期に近いこと、日月（太陽と月）のシンボルがあることなど、田の神の要素が多分に含まれている。田の神祭が子供のための祭に変質した興味ある一例である。「若越郷土研究 第2号」の合葉の祭を参照されたい。

春江町は今でこそベッドタウンの観がするが、もともと稲作の中心坂井平野にあり、田の神様の痕跡程度は探すことが出来る。東太郎丸区と西太郎丸区にはそれぞれ石の小祠があり、昔田んぼから発見された神様が両区に分けられて祀られていると言う。やはり扉には日月が彫られている。同様な祠が藤鷺塚区や江留中区の神社境内に散見されるが、古老でもソノ由緒を知るものはほとんどいない。近くには銅鐸の出土した大石地区のある土地柄だから、調査をすればまだまだこういった痕跡は見つけられるはずである。

IV 調査及びその考察から

奥能登地方では、12月5日を田の神迎えと呼び、2月9日を田の神送りと呼んでいることに違和感を覚える。田の神信仰は日本列島のあらゆる地方に現存もしくは痕跡となって残っているが、その多くは春に天もしくは山から神を迎え、秋に神を送るというものである。春に予祝祭や豊作祈願が行われることを考えると、奥能登の場合合点がいかない。しかし、目に見えぬ神をいますがごとく響応する素朴なさまを見ると、こちらの方が歴史的に古いのではないかとさえ思われてくる。

二股大根が多く供えられるのは、女性の体つまり豊饒祈願のシンボルゆえであろう。簡略化が

進んでいると思われる福井県の平林町の田の神祭でも、坂井町島の合葉の祭でも大根が生で供されるのはその名残りとは考えられないだろうか。

田の神と山の神との関係についてもまだ釈然としない部分が多い。秋に田の神送りをする、神は山の神となると多くの土地で考えられている。これは自然の地形による影響であって、地域差があって当然ではないか。輪島の中谷家の場合、箸を作るために山に入ることぐらいしか山との関連は見られなかった。近くに、神がましますと思えそうな山がある地域では、神が田と山の間を去来し交替すると考えるのが自然である。狩猟、林業に携わる人々の信仰する山の神とは別なことは無論である。

アエノコトのアエやアイノコトのアイは、アエル（饗応する）の意味とするのが民俗学の定説である。しかし、この民俗伝承者の中には刈り上げと正月の中間、つまりアイダと信じている者もいる。相嘗祭（アイナメサイ又はアイニエマツリ）のアイと考えることも出来る。こう考えるほうが単純にして明解なら、まだ完全なる定説とは言い難い。

福井県嶺北地方の田の神信仰では日月のマークがシンボルとなっていることはすでに述べた。中には元禄年間に彫られているのがあることから、この地方では江戸時代には田の神に関する統一的な考え方が一般的になっていたと考えられる。

福井県武生市平林町や春江町東太郎丸及び西太郎丸の自然石を神体とする風は、岐阜県坂下町にもあることが知られ、南九州地方のタノカンサア（田の神様）と呼ばれるものや余田町の石像の基盤になっていると考えられる。

亥の子信仰との関連も見逃せない。もとは10月15日の望月の日の行事であったが、中世になって十二支の観念が入ってからは亥の月にあたる10月の亥の日をその祭とする所が多い。関西から西に多く分布しているが、稲の刈り上げ祭である。この日に田の神が田から家に帰られるとし、餅を搗いて納戸や倉などに供える所が多い。亥つまり猪は多産であることから豊作を祈願する。旧暦2月に春亥の子と称して田の神を祭る地方もある。関東では十日夜（とおかんや）や案子上げと呼ばれている。田と家の間を去来するという信仰では一致が見られる。

他の稲作儀礼との関連にも言及すべきであろう。中国地方の大田植やサンバイ祭、各地のサオリ（サビラキ）やサノボリ（サナブリ）等との関連も興味深いものだが、ここでは日本の宮中儀礼との関連のみにとどめたい。宮中行事の中でも、春の祈念祭と秋の新嘗祭は特に重要である。田の神を送迎する時期とこれらの時期が一致することから、アエノコトとか田の神様と呼ばれるものは、民間における祈念祭と新嘗祭と見て良いであろう。天皇即位の年は新嘗祭に代わって大嘗祭が執り行われるが、その特色は饗応と籠もりとみそぎにあると言われる。饗応は問題ないとして、籠もりとみそぎの点には異論のあるところである。しかし、奥能登のアエノコトの、ある地域ではナンド（夫婦の寝室）に神が籠まられるとするものがあるし、神に代わってゴテが風呂に入る地区もあることを考え併せると、同根のものと考えて差し支えないであろう。

東南アジア大陸部特に北部タイでは、稲霊の祭祀を農家の主婦が担当し、稲作の周期に従って稲霊が田と米ぐらの間を去来していると言う。アエノコトの田と家間の神の往来が連想されてく

る共通点である。種耜を依り代あるいは神体として神聖視することから、そこに宿る神が桶霊だと考えられないこともない。記紀及び延喜式に散見される『ウカノミタマ』、『トヨウケビメ』は桶霊ともみなされよう。しかし、奥能登のアエノコトの場合、神迎えの行事以後は神送りの日までは何の響応も奉仕もないことや、神への口上の内容から見ると、東南アジア大陸部に共通する桶霊あるいは穀霊と同一視することには無理がある。この点については文化人類学等の研究が待たれる。

農神、地神、恵比須大黒、竈神、水神、歳神や大根の年取りと言われる行事などとの関連や守護神や祖霊などとの関連についても機会を移して調べてみたい。

V 結び

民俗信仰とは領域を異にするが俗信・迷信の類いも根強く存在する。ここでは一例として六曜（六輝）を考察してみたい。

中国唐時代の暦算学者の李淳風の六壬時課がその起源で、日本に伝えられた時には小六壬と呼ばれていたものである。その起源では、『大安は大吉昌なり、留連は事成り難し、速喜は速やかに来臨す、赤口は口舌を主る、将吉は最も吉昌なり、空亡は事長からず』となっている。日本の六曜と比較させると、留連は友引、速喜は先勝、将吉は先負、空亡は仏滅に相当する。日本では先勝は「諸事急ぐことによし。午後よりわるし」、友引は「朝夕よし、正午わるし」、先負は「諸事静かなることによし。午後大吉」、仏滅は「万事凶。口舌を慎むべし。患えば長びく」、大安は「移転開店等万事利あらざることなし。大吉日」、赤口は「諸事ゆだんすべからず、用いるは凶。正午少しよし」とする時刻の吉凶占いである。ところが民間では、友引は「友を引く」から葬式には不向きとする。「相打ち友引とて勝負なし」と言われたように、本来の暦注とは異なった解釈をしている。仏滅は物滅とも書かれたように仏教とは無縁のはずである。六壬の配当も機械的だが、六曜の場合旧暦各月の朔日をそれぞれ、正月と7月は先勝、2月と8月は友引、3月と9月は先負、4月と10月は仏滅、5月と11月は大安、6月と12月は赤口とし、二日以降は六曜の順序に従って順次に配当しているだけである。朔日も1月、2月、3月・・・と当てはめただけで、新暦の現代ともなると何か意味ありげに受け取られているにすぎない。暦注としては比較的新しく、六曜が今の名称になったのは享保以後であり、広く信じられるようになったのは幕末ごろと考えられる。たかが日本だけで支持されている俗信・迷信の類いだが、気にする現代人も多い。

民俗信仰・民間信仰にしても、俗信・迷信にしても、これだけ科学の発達した現代に何故続いてきたのだろうか。確かに科学は迷信等を駆逐するのに力がある。しかし、科学的合理性という基準自体が普遍的・絶対的なものではなく、あくまで相対的なものである。まして心の領域に深く関わる事柄については、非合理的なものや矛盾したものが多く認められ、そうしたものもまた心の領域の本質の一つでもあるからである。

奥能登のアエノコトを昔ながらの形で伝承している家々の宗教を調べてみると、真言宗が目立つ。逆に真宗の家々では廃れているかあるいは簡略化が著しい。真宗信仰は弥陀一仏を強く説き、真言宗では包括的で大らかなせいに違いない。柳田民族学が嘆いたように、真宗の盛んな地方には古い民俗が伝承されにくいことがこの地方でも窺える。

日本人の宗教意識の基層にはタタリ信仰とオカゲ信仰があり、その両方のバランスによって古い信仰が継承されていると思われる。超自然的なるものに恵みを感じずる一方で、祟りを恐れているのである。記紀に見られる和魂（ニギミタマ）と荒魂（アラミタマ）が連想されてくるが、勿論前者が温和な恵みをもたらし、後者が荒々しく災厄をもたらすのである。古来より日本人はカミや靈魂にはこの二種類の性格があると信じてきた。正しく祀らなければタタリがあるのである。合理的なはずの現代人の深層意識の中にこれが十分潜んでいるに違いない。

こう類推してくると、古い民俗信仰や俗信も大きく変質・縮小することはあっても、完全になくなることはないと思われる。古代の日本人も現代の日本人も、こと宗教心に限るならば、そんなに変化してきていないと思う私の意見に同意していただけるだろうか。

参考文献

1. 原田正彰 奥能登のあえのこと 昭和53年3月31日 北国出版社
2. 大島建彦 日本を知る事典 昭和46年10月15日 社会思想社
3. 小野泰博 日本宗教事典 昭和60年2月10日 弘文堂
4. 西角井正慶 年中行事辞典 昭和33年5月23日 東京堂出版
5. 大間知篤三 民俗の事典 昭和47年1月17日 岩崎美術社
6. 石上 堅 日本のこころ 昭和44年11月20日 雪華社
7. 藤本良致 北中部の歳時習俗 昭和50年11月5日 明玄書房
8. 大久保道舟 武生市史 民俗篇 昭和49年3月30日 武生市史編纂委員会
9. 小葉田淳 福井県史 資料篇15 民俗 昭和59年3月1日 福井県
10. 斎藤興次兵衛 春江町史 昭和44年5月3日 春江町
11. 桜井徳太郎 民間信仰辞典 昭和55年12月10日 東京堂出版

(平成7年12月8日受理)